

平成 28 年 5 月 27 日現在

機関番号：15201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25780390

研究課題名(和文) 関係性の観点を取り入れたやつ当たりの攻撃モデルの提案

研究課題名(英文) Interpersonal relationships and triggered displaced aggression

研究代表者

淡野 将太 (Tanno, Syota)

島根大学・教育学部・講師

研究者番号：20618532

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：関係性の観点を取り入れたやつ当たりの攻撃モデルを提案した。やつ当たりの攻撃の生起に攻撃者および攻撃対象者の関係性がどのように影響するのかを分析した結果、攻撃対象者によってやつ当たりの攻撃の表出の程度が異なること、また、攻撃対象者が攻撃者の行動傾向に理解を示し攻撃行動を受容することを考慮してやつ当たりの攻撃を行うことが明らかになった。やつ当たりの攻撃に及ぼす認知的要因の影響を検討するに留まり、関係性という社会的要因の影響については検討していなかった先行研究の知見に対し、攻撃者と攻撃対象者の関係性が影響を及ぼすことを示した。

研究成果の概要(英文)：Present study examined the effect of interpersonal relationships on triggered displaced aggression and proposed a renewed look at theoretical model of triggered displaced aggression. Diary study and interview study showed that exhibition of displaced aggression depends on the target valence as relationships such as aggressors' friends or siblings.

研究分野：教育心理学

キーワード：攻撃行動 やつ当たり

1. 研究開始当初の背景

(1) やつ当たりの攻撃 (displaced aggression) とは、個人が欲求不満や怒りを喚起する挑発事象を経験した時に、挑発の源泉ではない他の対象に攻撃を表出する攻撃行動である。例えば、試合後に監督から批判を受けたサッカー選手のタロウが、新人選手であるマットにきつく当たる、といった行動がやつ当たりの攻撃である。また、TDA (triggered displaced aggression) とは、誘発されて表出するやつ当たりの攻撃を指す。上記の例において、マットのちょっとした失言をきっかけにやつ当たりを行った場合、これを TDA と呼ぶ。挑発者に対して攻撃を行う直接的攻撃 (direct aggression) と比較して、挑発者と攻撃対象者が異なる点が特徴であり、家庭内暴力、児童虐待、いじめなどの暴力行動を説明し、低減に向けたアプローチを提供する概念として注目されてきた。

(2) やつ当たりの攻撃の心理学的研究の変遷をまとめると次のようになる。欲求不満-攻撃仮説 (Dollard, Doob, Miller, Mowrer, & Sears, 1939; Hovland, & Sears, 1940) は、欲求不満による攻撃の矛先が挑発の源泉ではない他の対象に向けられる時にやつ当たりの攻撃が生起する、と仮定した。この仮説の演繹的な現象の記述という形式で、社会心理学者を中心に 1980 年代後半まで実験研究が展開され、やつ当たりの攻撃の現象成立が検討された。研究が進展すると、実験結果が一貫せず、やつ当たりの攻撃が生起すると結する研究とやつ当たりの攻撃が生起しないと結する研究が散発するようになった。加えて、やつ当たりの攻撃の強度の調整変数はほとんど検討されていなかった。そのため、やつ当たりの攻撃の現象成立は疑問視され、研究者のやつ当たりの攻撃に対する関心は低下し、1990 年代以降はほとんど研究が行われなくなった。

(3) TDA 研究としてのやつ当たりの攻撃研究の動向をまとめると次のようになる。2000 年になり、ふたつの研究が提出されたことでやつ当たりの攻撃研究は加速する。Marcus-Newhall, Pedersen, Carlson, & Miller (2000) は、やつ当たりの攻撃の実験研究についてメタ分析を行い、やつ当たりの攻撃は確かに生起することを示すとともに、調整変数について言及を行った。Pedersen, Gonzales, & Miller (2000) は、実験室において TDA を検討する実験手続きである TDA パラダイムを構築した。ふたつの知見を受けて、やつ当たりの攻撃の誘発メカニズムに関する理論モデルである TDA 理論 (theoretical model of triggered displaced aggression: Miller, Pedersen, Earleywine, & Pollock, 2003) が提唱された。現在、TDA 理論を軸にやつ当たりの攻撃の誘発メカニズムについ

て精緻化を行いながら、やつ当たりに従事しやすい個人差を測定する尺度の開発や、やつ当たりの攻撃を誘発しない緩衝効果 (buffering effect) の検討が進んでいる (e.g. Pedersen, Denson, Goss, Vasquez, Kelley, & Miller, 2011; Vasquez, Pedersen, Bushman, Kelley, Demeestere, & Miller, 2013)。

(4) やつ当たりの攻撃は挑発者、攻撃者および攻撃対象者の 3 者関係において生起するにも関わらず、先行研究はやつ当たりの攻撃に及ぼす認知的要因の影響を検討するに留まり、関係性という社会的要因の影響についてはほとんど検討していない。やつ当たりの攻撃は、挑発者と攻撃対象者が異なる点が特徴であり、関係性が影響を及ぼすことは明らかであるが、その影響が考慮されていない。やつ当たりの攻撃の生起メカニズムをより詳細に説明するためには、やつ当たりの攻撃に及ぼす関係性の影響を検討し、やつ当たりの攻撃の生起メカニズムをより詳細に説明する関係性の観点を取り入れたやつ当たりの攻撃モデルを提案することが求められると言える。

2. 研究の目的

上述の研究開始当初の背景に記した先行研究の動向を受け、やつ当たりの攻撃の生起メカニズムをより詳細に説明するために、やつ当たりの攻撃に及ぼす関係性の影響を明らかにし、Miller et al. (2003) の TDA 理論に関係性の観点を取り入れることを目的とした。TDA 理論は、やつ当たりの攻撃の生起メカニズムについて次のような理論的枠組みを仮定する。すなわち、個人が挑発事象を経験した時、攻撃に関連する感情、認知、および覚醒が活性化される。この活性化は、後の事象に対する帰属の歪みを生み、誘発事象を経験するとたとえ些細なものであっても敵意的に解釈し、やつ当たりの攻撃が生起する。研究代表者は、これまでに、やつ当たりの攻撃の規定因に関する研究を行う中で、地位が低い個人はやつ当たりの攻撃の対象者となりやすいことを明らかにした。また、緩衝効果として攻撃者と攻撃対象者の関係性を操作した研究においては、攻撃者と攻撃対象者の関係性が良好であることが緩衝効果として働き、やつ当たりの攻撃を抑制することを明らかにしてきた。関係性が良好であることは、誘発事象を敵意的ではないものとして解釈する方向に影響し、やつ当たりの攻撃が生起しないと考えることができる。

3. 研究の方法

(1) 大学生を対象とした日記研究を行い、日常場面におけるやつ当たりの攻撃に及ぼす関係性の影響を検討した。日記研究の 1 日目には、直接的攻撃に従事しやすい傾向を測

定する BAQ (Buss and Perry Aggression Questionnaire, Buss & Perry, 1992), やつ当たりの攻撃に従事しやすい傾向を測定する DAQ(displaced aggression questionnaire, Denson, Pedersen, & Miller, 2006) などの個人特性に関する質問項目について調査を行った。日記研究の 2 日目から 14 日目には, 日記を用いてやつ当たりの攻撃の生起メカニズムを検討する質問項目として体調や怒りを経験したエピソードについての自由記述, やつ当たりの攻撃に従事した程度を問う質問項目について調査を行った。14 日間の日記研究を通して, 日常場面において個人がどのような出来事によって怒りを感じ, 攻撃的思考を抱き, やつ当たりの攻撃が生起するのか, また, 攻撃者および攻撃対象者の関係性がやつ当たりの攻撃の生起にどのように影響するのかを分析した。

(2) 上記の大学生を対象とした日記研究に加えて, 大学生を対象としたインタビュー調査を行い, 日常場面におけるやつ当たりの攻撃に及ぼす関係性の影響を検討した。インタビュー調査では, 質問紙研究や日記研究では収集が困難なやつ当たりの攻撃に及ぼす攻撃者と攻撃対象者の関係性に関する思考などの詳細について聞き取りを行った。日記研究と同様に, インタビュー調査を通して, 日常場面において個人がどのような出来事によって怒りを感じ, 攻撃的思考を抱き, やつ当たりの攻撃が生起するのか, また, 攻撃者および攻撃対象者の関係性がやつ当たりの攻撃の生起にどのように影響するのかを分析した。

4. 研究成果

(1) 日記研究において, やつ当たりの攻撃に及ぼす攻撃者および攻撃対象者の関係性影響を分析した結果, 攻撃対象者は母親, 友人, きょうだいが多かった。この結果は, 攻撃対象者によってやつ当たりの攻撃の表出の程度が異なることを示している。

(2) インタビュー調査において, やつ当たりの攻撃に及ぼす攻撃者および攻撃対象者の関係性影響を分析した結果, 攻撃対象者が攻撃者の行動傾向に理解を示す関係性があり, 攻撃行動を受容することを考慮してやつ当たりの攻撃を行うことが明らかになった。研究当初は, 攻撃者と攻撃対象者の関係性が良好であることは, 誘発事象を敵意的ではないものとして解釈する方向に影響し, やつ当たりの攻撃が生起しないと考えられたが, 関係性が良好であることが攻撃の受容可能性を高め, 攻撃表出可能性を高めることが明らかになった。

(3) 日記研究およびインタビュー調査の両方において, やつ当たりに及ぼす挑発者と攻撃者の関係性の影響および挑発者と攻撃対

象者の影響は確認されなかった。

(4) 日記研究およびインタビュー調査の両方において, やつ当たりの種類を分類した結果, 人に対する言語的攻撃 (e.g. 相手を非難する, 相手に暴言をはく) が最も多く, 次いで, 物に対する攻撃 (e.g. 机を叩く, 物を投げる), 人に対する身体的攻撃 (e.g. 相手を叩く, 相手を蹴る) が多かった。

(5) 日記研究において, 自由記述では, 挑発事象後に対処行動 (e.g. 気晴らし, 発散) を行うことで, 挑発事象による怒りやネガティブ感情を低減したと記述したものが報告された。

(6) 今後の展望を記す。近年では, やつ当たりの攻撃の生起メカニズムに即した介入研究によって, 家庭内暴力, 児童虐待, いじめを低減する試みが展開されている。本研究知見は, それら介入研究にもより詳細な基盤知見を提供する点で貢献する。

(7) 本研究知見は大学生を対象として得られたものであり, 攻撃対象者の特性などは大学生に特徴的である可能性があり, 一般化可能性の限界と言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

Tanno, S. & Isobe, M. Effect of a psychoeducational intervention on displaced aggression. *Memories of the Faculty of Education*, 査読無, 48, 2014, 39-42.
<http://ir.lib.shimane-u.ac.jp/bull/bull.pl?id=8852>

淡野 将太 やつ当たりの研究パラダイム 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部 (教育人間科学関連領域), 査読無, 62, 2013, 99-104.
http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/35401/20141225141452738597/BullGradSchEduc-HiroshimaUniv-Part3_62_99.pdf

[学会発表](計2件)

淡野 将太 怒り経験に対する心理教育的介入, 日本教育心理学会第 57 回総会, 2015 年 8 月 28 日, 朱鷺メッセ (新潟県新潟市)

Tanno, S. Interpersonal relationships and triggered displaced aggression. *13th European Congress of Psychology*, 2013 年 7 月 10 日, Stockholm (Sweden)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

淡野 将太 (TANNO Syota)

島根大学・教育学部・講師

研究者番号：20618532